

12月例会 オンライン発表 予定

発表者:池村 俊郎 日本仏学史学会 会長

演題: 1940年パリ陥落を見た日米ジャーナリストの報道から考える

(オンライン発表を予定している関係で、具体的な発表と参加の仕方については事務局と相談の上、追ってお知らせすることといたします)

発表骨子:

第2次(欧州)大戦開始からほぼ9か月後、1940年5月に始まったドイツ軍の西部戦線大攻勢はオランダ、ベルギーを短日の間に降伏させ、6月14日にはパリ無血開城へと急展開していった。陸軍大国フランスをまたたく間に降伏させたドイツ軍の電撃戦の強烈な印象は、日独伊3国同盟を結ぶ要因となり、極東の日本で政府、世論をして無敵ドイツ礼讃となって大きな反響を呼んだ。フランス敗北は日本を日米戦争へ導く序章となったし、結果的に5年後の広島、長崎の悲劇へ道を開くことにもなった。

フランス降伏直前の独軍パリ入城は、ドイツ政府の発表とともに、ベルリンから軍同行取材団としてパリへ入った各国ジャーナリストにより新聞、ラジオを通じ、世界に報道された。そこにはまだドイツと戦争状態にはないアメリカ、そして親独ながら中立国の日本の記者が含まれていた。彼らの報道は、ドイツ国内の検閲、とくに日本の検閲等の制限の中で、どう本国で受け取られたか、政策や世論形成に一つの影響力をもったはずである。

そこで米 CBS 放送(ラジオ)ベルリン特派員 W.シャイラーのラジオ報道原稿(未邦訳)と、戦後発表した詳細な日記(日本語版あり)をもとに、当時の朝日新聞報道と、とりわけパリ陥落を含め、2度、ドイツ軍同行取材を行った守山義男記者のルポ記事などを比較して、一方にあって、もう片方にはなかったもの、その価値観、視点を類推しつつ、比較検証してみたい。そこから日本のジャーナリズムに決定的に欠落した何かが見えてくるはずである。

発表の構成概略:

- 1) 40年5月からのドイツ軍西部攻勢の概観と、英仏連合軍の対応。短期間の防衛線崩壊の原因は何だったのだろうか。
- 2) シャイラーのラジオ放送原稿「This is Berlin」(こちらベルリン)と彼の日記メモ、そして朝日新聞に掲載された守山ベルリン特派員の西部戦線ルポ記事、とくに陥落直後のパリを日本人記者としてただ一人目撃し報道した彼の記事(その後、徳富蘇峰国民賞を受賞)に焦点をあて、何を伝え、何が伝えられなかったのか、比較検証してみたい。
- 3) これまで前大戦初頭の大成功事例とされてきたナチ・ドイツ機甲戦車部隊の対フランス電撃戦は、最近、ドイツ語文献の研究結果から、いわゆるような天才的な軍事的戦術だったのではなく、敵失と幸運のめぐり合わせが大きかったという冷静な評価が出始めている。遅きに失したとはいえ、日本も歴史の幻想から目覚めなければならない。